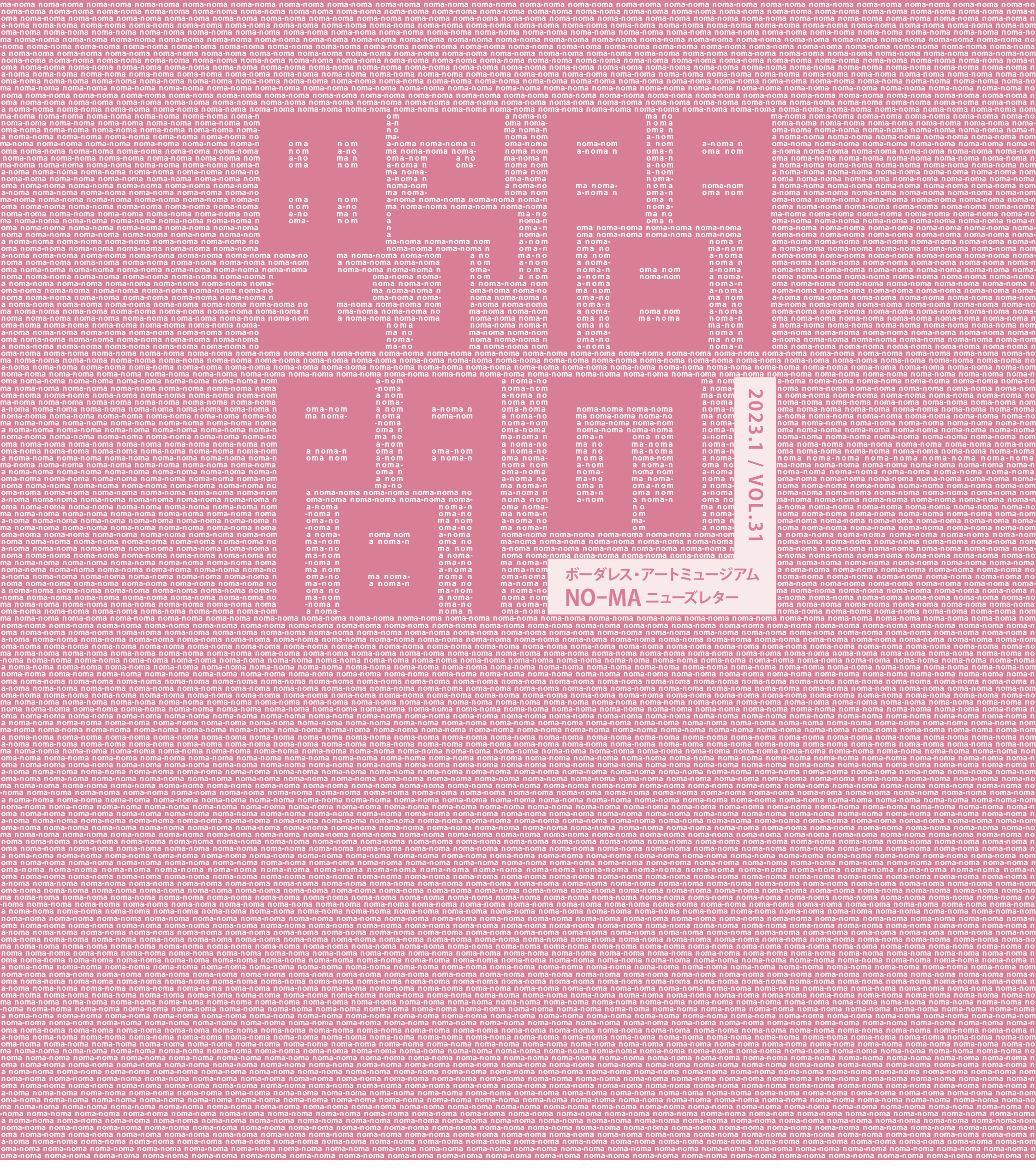


特集　NO-MA×サンタナ学園
2021-2022 RECORDS

展覧会レポート　絵になる風景

Topic of NO-MA　ing展が、必要なくなるその日まで。

特集

NO-MA×サンタナ学園 2021-2022 RECORDS

NO-MAではブラジルルーツの子どもたちが通うサンタナ学園と様々な交流を進めています。2021年秋、生徒たちをNO-MAの展覧会に招待して鑑賞会を開いたことをきっかけに交流を深め、2022年からはアーティストの金仁淑さんをお招きして、夏にNO-MAで動画撮影ワークショップを、秋に近江八幡旧市街地で街歩きのワークショップを実施しました。

交流を深めるにつれ、サンタナ学園やその生徒一人ひとりが置かれた厳しい環境を目の当たりにする一方、学校といった枠組みを超え大きな家族ともいえるような温かく強い人と人との結びつきも見えてきました。

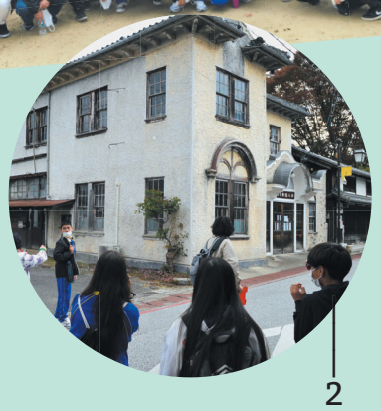
交流の記録や金仁淑さんのインタビュー、企画立案者である山田創さん（元NO-MA学芸員・現滋賀県立美術館学芸員）の寄稿（裏表紙掲載）から、NO-MAとサンタナ学園との交流を通じて見えてきたことを皆さんにお伝えします。

（2022年秋以降は、NO-MAを中心とした文化庁補助事業「ケアしあうミュージアム事業」としての取り組みです）

〈サンタナ学園とは〉

サンタナ学園は、1998年に愛荘町で開校したブラジルルーツの子どもたちを受け入れている保育・教育施設です。プレハブの建物と一軒家を組み合わせた場所に、0～18歳までのおよそ80名の生徒たちが通っています。滋賀県内の湖東エリアや東近江エリア、甲賀エリアにまたがる生徒たちが在籍していて、通学送迎もサンタナ学園が行っています。授業はポルトガル語で、教科書もブラジルで使われているものを用います。また、保育・教育以外に子どもたちやその保護者の様々な生活サポートも行っており、ブラジル人コミュニティを支える役割を担っています。

サンタナ学園との交流の記録



2021年秋 サンタナ学園との出会い

NO-MAパンフレットのポルトガル語版作成をきっかけに、サンタナ学園の生徒たちをNO-MAの展覧会に招待し、鑑賞会を開きました。そこで、「交流事業は1回で終わってしまうことが多いのですが、本当は継続的な交流があってこそ意義があると思っている」という支援者からの言葉があり、その後の事業へと繋がっていきました。

2022年夏 金仁淑さんとNO-MA鑑賞&撮影会

NO-MA学芸員と金仁淑さんがサンタナ学園を訪れた際、子どもたちがTikTokやInstagramといったメディアを好み、セルフィー（自撮り）の技術があることを知りました。そこで、7月にNO-MAの展覧会を鑑賞した後、子どもたち自身が作品紹介の動画を撮影するというワークショップを実施しました。その後、金仁淑さんに映像を作成いただき、YouTubeに公開しました。

YouTubeの鑑賞はこちらから⬇

2022年秋 交流を重ね、近江八幡街歩きへ

9月から毎月1週間ほど、金仁淑さんや山田創さんとともに、サンタナ学園での滞在交流を行いました。その交流のなかで子どもたちに、ブラジルと日本の文化がミックスされていることをポジティブにとらえてほしいと考え、日米の様式がミックスされた建築が町の文化として保存されている近江八幡旧市街地のヴォーリズ建築に着目した街歩きのワークショップを実施しました。八幡旧市街に詳しい成安造形大学助教の田口真太郎さんに近江八幡やヴォーリズについて話していただいたり、八幡山ロープウェーで山上にのぼりみんなでコロッケを食べたりと、様々な角

展覧会レポート
Exhibition Report

文：横井悠（本展担当学芸員）

その人の思い出や境遇などにより異なる姿をみせる「風景」。それを絵にすることとは、常にうつろうこの世界を、絵という画角の中に留めていくことといえます。描き手は外の景観を心の内に捉える。そして、自らの身体と画材を通して、再び外に吐き出す。その往復を繰り返す中で、内と外は分けがたく混じり合い、風景は絵になっていくのでしょう。ここでは、企画展「絵になる風景」で展示した、多様な角度から風景を捉える7名のアーティストによる表現を辿ります。

1階展示室では3名による作品に出会います。その一人である畑中亜未さんは、「光るもの」をモティーフとしたシンプルな風景を幼少の頃から描いています。白熱球やカミナリなどが光る状況を大胆な構図で捉えた作品には、光に対する素直な驚きや感動があふれています。

福田絵理さんは4点の油彩画を展示しました。おぼろげな空間にかすかな光が差す心象的な世界が描かれます。作品の前に立つと、心地よさや不安感など、相容れない複雑な感覚に浸ることができます。

最後は三橋精樹さんです。彼の絵は一見すると真っ黒な平面に見えます。しかし、じっくりと覗き込むと、そこには記憶を基にした綿密な風景が浮かび上がります。裏に書かれている説明文と交互に見ることで、その時代時代の三橋さん自身に出会うかのようです。

ちなみに本展では1階会場の両側にある透明なガラス戸をすりガラス風に変更していました。外の視線を程よく遮り、やわらかい光を均一に取り入れた展示会場は、より落ち着いた印象の中で一つひとつの作品に向き合える空間となりました。

蔵の戸を開けると、古久保憲満さんの巨大な作品が目に飛び込んできます。架空の都市を描いた作品で、その全長は10mにもおよびます。本展では鑑賞者を囲うように作品を展示。それはまるで古久保さんの頭の中のパノラマ世界が、果てしなく広がるかのようでした。

自然光をふんだんに取り入れた2階の展示は、1階と比べて対照的に映ります。ひと際鮮やかで大らかな絵を描くのが衣真一郎さん。《横たわる風景》は、古墳や建物や道、雲といったモティーフがシンプルな色と形で表現され、衣さんのユニークな視点が感じられます。

部屋の中央に展示したのが、古谷秀男さんの作品です。古谷さんは16歳で開拓移民としてブラジルに渡り、約30年暮らし帰国。還暦を迎えてから絵を描き始めました。日本とブラジルで過ごした経験が空想世界と結びつき、彩りにあふれる風景を形作りました。

そして、奥の空間には、モン族としてのルーツを持つドゥ・セーソンさんが一針一針縫い上げた刺繍を展示しました。モン族は「移動の歴史」を持つ民族です。そのむかし支配民族に押され、また戦火に巻き込まれたことで大移動を繰り返し、その結果民族は大きく分かれていきました。集団としての記憶を物語る刺繍は、あたりまえの日常を送ることのかけがえのなさを気づかせてくれます。

本展では様々なアプローチによる風景と出会い、気づきを得る機会となりました。ウェブ上で展覧会を楽しむことができる「360度パノラマビュー」も公開していますので、展覧会を観に来られなかった人はぜひご覧ください。

「360度パノラマビュー」（本年5月まで公開）
制作：平垣内悠人（MILLIEN PHOTOGRAPHIC）

絵になる風景
2022年8月11日（木・祝）～11月6日（日）

古久保憲満、衣真一郎、ドゥ・セーソン、畑中亜未、福田絵理、古谷秀男、三橋精樹

主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
社会福祉法人グロー～生きることが光になる～
京都新聞

後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会

協力：近江八幡観光物産協会、織り人（Orijin）、マエダクリーニング仲屋店、しみんふくし滋賀、生活介護事業びーと、大和高原 太陽の家

（上）蔵展示風景（中）2階展示風景（下）1階展示風景
撮影：平垣内悠人（MILLIEN PHOTOGRAPHIC）

度から文化を感じ取れるよう工夫をしました。

2022年冬 サンタナ学園卒業式

12月に行われたサンタナ学園の卒業式の機会に、今回の交流やワークショップで体験したことを基に生徒たちに何か発表してほしいと考えました。先生や生徒と一緒に何ができるかを模索して、生徒代表2名がこの取り組みについての手紙を書き、金仁淑さんがセレクトしたワークショップの写真を背景に卒業式の舞台で読み上げました。一部生徒の手紙を抜粋して紹介します。

「日本人とブラジル人、そして韓国人の金仁淑さんというように、一つの文化と他の文化が混ざり合うことの重要性は、生活習慣が違うからこそ、お互いを知ることができる、しかし一方が他方を補うことができる、ということでしょう。共存していくことで、想像もしていなかったような共通点をたくさん発見できるのです」

金仁淑さんは、この期間、サンタナ学園の皆さんと作品制作を行いました。東京都写真美術館で開催する恵比寿映像祭2023「コミッション・プロジェクト」にて、2月3日から展示されます。

INTERVIEW 金 仁淑 KIM Insook

2022年の春より、NO-MAとともにサンタナ学園と関わっているアーティストの金仁淑さんに、お話をうかがいました。

本人右端

Q. 初めてサンタナ学園を訪れたとき、どのような印象を受けましたか。

数軒のお家を連ねて運営されていることが衝撃的でした。多国籍な外見の子どもたちがいて、学校や在日ブラジル人への自分の凝り固まった考えが揺さぶられる経験でした。

Q. まず、子どもたちと何をしようと思いましたか。

できるだけ一緒にいようと思いました。よく知らずに近づくのは、自分の固定概念を押し付けてしまいそうでよくないと考えたからです。言語の壁があるため、スキンシップや身振り手振りで、「あなたとちゃんと向き合いたい」という想いを表現し続けました。そのことは、子どもたちの反応やプロジェクトの内容にも影響したと思います。

Q. 一緒にいることでどのようなものが見えてきましたか。

大家族のように暮らしていること、日本社会との繋がりがないこと、個別の対応が必要じゃないかと思うくらい一人ひとり、とりまく環境が異なることが見えてきて、どんなプロジェクトにすればよいか、悩みました。そのなかで、子どもたちと自分との共通点でもある、2つの国の文化で生きることに、負のイメージではなくプライドを持ってほしいと考えました。

Q. 2つの国の文化を持つことのプライドについてもう少し詳しく聞きたいです。

2つの文化のなかで生きるということは、どちらにも完全には属せないんですが、両方に属すこともできます。2つの国の狭間、その境界は点や線ではなく、広い幅のボーダーだと思います。あるときはこっち寄り、あるときはあっち寄りと、どちらにも入れてもらえたりもらえなかったりの繰り返しです。今後、そのことに傷つくことがあるかもしれないけれど、2つの文化にプライドを持っているとポジティブに自分を支えられることがあると思うんです。

Q. 興味深いですね。2つの文化にプライドを持つには両方の国のことを好きでないと難しそうですね。

その通りだと思います。楽しい体験を通じて、自分の住む地域が自分を形成する一部になっていることも認識してくれたと思います。

Q. 子どもたちに将来どうなってほしいと思いますか。

子どもたちの個性を発揮できるほどの自信やプライド、楽しみを持って生きてほしい。そのためには広い視野を持ち、様々な選択肢があることを知る機会が増えるといいと思う。今後はダンスなど、別の表現や様々な仕事についても楽しみながら体験してもらうアートプロジェクトができたらいいなと思います。

ノマ Topic of NO-MA トピ

ing展が、必要なくなるその日まで。

文・御代田太一（事業担当）

「第19回滋賀県施設・学校合同企画展ing… ～障害のある人の進行形～」が2月5日まで開催されています。今年度も、6回にわたる実行委員会での議論を経て、各作品の出展方法などをブラッシュアップし、開催に至りました。

今回、図録の巻末企画の一貫として、第1回から事務局や実行委員として本展に関わってきた能登川作業所の西原さんにお話を伺いました。その内容が印象的だったのでご紹介します。

さかのぼって、2003年。第1回ing展の実行委員会の会場。西原さんは、興味本位で初代実行委員長の方に「ing展ってこれからどうなったらいいんですかね？」と尋ねたそうです。すると「なくなってしまえばいい！」と。西原さんは「なんてことを言うのか……！」と思ったそうですが、「各施設が展覧会をガンガンできるようになれば、ing展は必要なくなる」という意味だと知り、感銘を受けたそうです。

スタート当初は、施設ごとに場所を区切ってブースを出すのみだったそうで、徐々に「一人ひとりの作家をきちんと見せよう」という想いで、作品にフォーカスするようになっていったそうです。

2023年になっても、ing展がなくなるまでには至っていませんが（笑）、形を変えながら、必要とされ続けていることはうれしいことです。

また、西原さんのような常連さんもいれば、今年ing展デビューしたという実行委員さんも。そして実は「転職してしまったけれど、転職先でおもしろい作品を作る利用者を見つけたから、またing展に参加したい」といってくれ、転職先からエントリーしてくださった方まで。29もの施設から集った実行委員の皆さんによって、滋賀県内の表現活動の裾野が静かに広がっていることを感じます。

出展作品も、どれも味わい深いものばかりでした。前期の展示では眼球の動きから視線を読み取る機器を使い、手足を自由に動かせない方が目の動きだけで描いた作品や、デジタル紙芝居など、最新機器を使った作品も出展されました。様々なテクノロジーが生活圏に入り込んでいる時代において、表現のメディアもますます多様になっていくのかもしれません。

来年度は記念すべき第20回。ing展ファンの皆さん、ぜひ楽しみに待っていてください。

オープニングイベントとしてギャラリートークを実施（写真は前期）

第2回実行委員会にて／作品実見の様子

NO-MAで展示方法を検討

野間の間
noma-noma vol.31
2023年1月 発行：社会福祉法人グロー 法人事務局芸術文化部 TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228 デザイン：株式会社タケコマイ

NO-MA次回企画展
「林田嶺一のポップ・ワールド」

1933年に中国満州で生まれた林田嶺一は、幼少期を大連、ハルビン、上海、青島などで過ごし、その35年後、人生をかけた絵画制作に取り組み始めました。満州から日本へと引き揚げる12歳までの体験や場面を描いた「満州ポップシリーズ」です。深刻な現実を持ち前のポップな感覚で表現し続けた林田ワールドを体感いただきます。

2022年2月11日(土祝)～5月14日(日)

11:00～17:00／月曜休館（祝日は開館、翌平日休館）

会場：**ボーダレス・アートミュージアムNO-MA**

観覧料：**一般300円**（250円）、**高大生250円**（200円）
中学生以下・障害のある方と付添者1名無料
※（　）内は20名以上の団体料金

主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、
社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会
協力：近江八幡観光物産協会、マエダクリーニング仲屋店、しみんふくし滋賀

<NO-MA企画展グッズのご案内>

2022年11月6日まで開催していた企画展「絵になる風景」および第19回ing展の図録をNO-MAおよびNO-MAホームページにて販売しています。また、過去に開催された展覧会の図録や関連書籍、ポストカードなども取り扱っています。ぜひ、お求めください。

絵になる風景
〈価格〉1,200円（税込）
〈ページ数〉
バインダー形式（7枚）
＋小冊子11ページ
〈サイズ〉
23.0×31.0cm

第19回 滋賀県施設・学校合同企画展 ing…
～障害のある人の進行形～
〈価格〉600円（税込）
〈ページ数〉
46ページ（表紙含）
〈サイズ〉18.2×25.7cm

サンタナ学園の子どもたちとの交流に参加して

山田創（滋賀県立美術館 学芸員／本交流企画アドバイザー）

サンタナ学園のみんなと過ごした時間の中で、目に焼き付いて離れない光景がいくつかある。その一つが生徒の通学を支える送迎バスの中である。生徒たちの住まいは、滋賀県内のいくつかの町に分散している。サンタナ学園が持つ送迎車は6台。それぞれが朝と夕の登下校、各生徒の家とサンタナ学園を往復する。ドライバーは雇えないから、日中は授業をしている先生たちがこの運転を担う。最も長距離コースを行くバスだと、先生も生徒も往復で約6時間、車のなかで時間を過ごす。

このバスの一つに乗り込んだ。放課後の延長線上にある車内はにぎやかだ。ポルトガル語なので、何が話されているかは一つもわからない。香水なのか、お菓子なのか、甘ったるい匂いがしている。となりに座る10歳くらいの女の子が、わたしのシャツを引っ張りながら、なにかを伝えようと叫んでいる。意味を結ばない異国の言葉の散弾を浴びたわたしは、困った笑顔を浮かべることしかできない。車内で、わたしは、外国人だった。

フロントガラスに目を移すと国道8号線が田園を切り裂き、伸びている。時折、「ガスト」や「ファミリーマート」の看板や店舗が流れ去る。嫌というほど見た、滋賀県らしい風景だ。「○○石材」のような看板が通り過ぎた。きっと、この子たちの誰も、これが何を伝える看板なのか読み解けないし、この先も知ることはない。反対に、この車窓のガラス1枚先の側の世界の住人たち、つまり、多くの地域住民も、この子たちの存在を知ることも、関心を持つこともない。

出稼ぎのため来日したブラジル人たちの多くは、自動車部品などの工場で働く。彼らがどんな暮らしを送るか、あるいはその子どもたちがどんな教育を受けるか――わたしたちの社会は、「安い労働力」として以外の彼らへの想像力を欠いている。ふと、わたしは、移動するこのバスごと、巨大な無関心に包み込まれたかのような気がし、背筋が冷えた。

サンタナ学園には、あらゆる面から支援が必要である。建物や車両といったハードから、日本語教育といったソフトまで。それらに加えて、「社会関係資本 (social capital)」といわれるような、他者とのつながりや出会いをいかに作るかということも大切な視点である。バス空間に象徴されるように、サンタナ学園の子どもたちと地域社会の間には、透明だが超えがたい隔たりがある。

NO-MAと金仁淑さんの仕事は、この隔たりを乗り越えようとする活動だった。このうねりに、わたしも含め、自然と多くの大人が巻き込まれていった。我々は、ちょっとしつこいくらい何度もサンタナ学園を訪れ、子どもたちや先生と時間をともにした。

わたしたちが提供したアートプログラムは、彼らの生活や教育をすぐさま向上するものではないかもしれない。しかし、「ああ、あんなこともあったな」と、いつの日か振り返って微笑ましく思えるような経験ではあっただろう。そういう思い出こそ、いざというときの心の支えになってくれると信じている。

あどけない笑顔と、それを包む巨大な無関心、そういうものが消化できずに、澱となって心に残っている。事業を終えたからといって、「はい、おしまい」とは、できない。居場所を求める子どもがいる限り、サンタナ学園はこれからもあり続けるわけである。つながりを絶ってはならない、そう思うし、これからも考え続けようと思う。

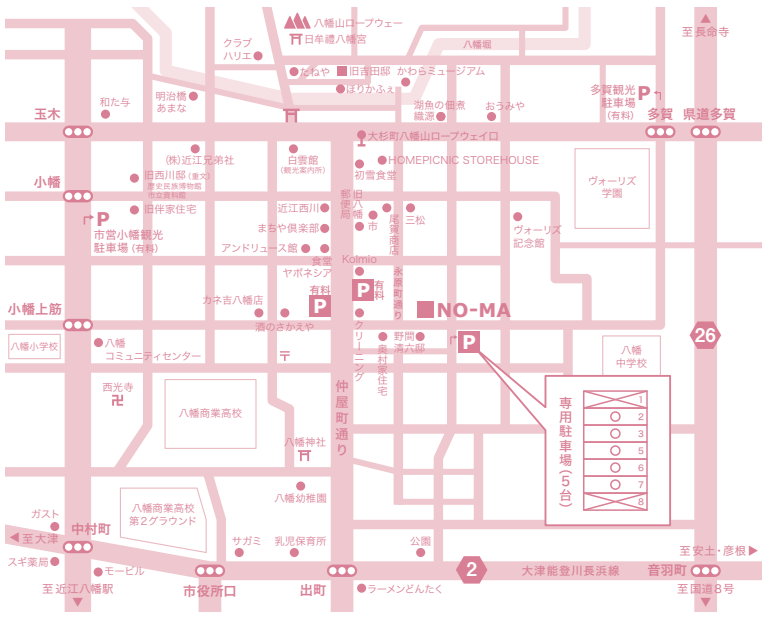
【編集後記】

編集担当・西野裕貴（主任主事）

学生の頃、アール・ブリュットになぜか惹かれ、それをテーマに卒論まで書いた。滋賀県職員になってからも、異動希望を出し続け、このグローに出向して働くことになった。そして、この夏、急遽サンタナ学園とのアートプロジェクトを含む事業の主担当となった。はじめは戸惑いながらも、とにかく現場に入り続けた。がむしゃらに進んでいくしかないのだが、ふと、「なぜ僕はこのプロジェクトをしているんだろう」と思うときもあった。

秋が過ぎ冬になり、事業を振り返る余裕ができたときに、気が付いた。これはあのとき惹かれたアール・ブリュットに似ているのだと。福祉だけでも芸術だけでも捉えきれない、その間にあるなにかを追っているのだと。福祉と芸術の間、障害者と健常者の間、外国人と日本人の間、課題が立ち現れるのはいつも境界だ。でも、その境界、制度や言葉に安住できない場所、だからこそ、一人ひとりの生、ブリュットが際立つように思うのだ。大人になることへの不安を抱え、一人悩んでいた学生だった僕は、境界をものともせずに自分を突き詰めている表現たちに救われていたのかもしれない。サンタナ学園との交流を含むこの事業は、美術館として展覧会を開くNO-MAのイメージとは一見かけ離れている。しかし、ここには貫かれた太い軸がある。それは「ボーダレス」だ。一人ひとりの中にある様々なボーダーを揺るがし、新たな景色を見せていこうとすることだ。自身のボーダーさえも揺るがしながら、時代の先端を開いていく。「ボーダレス」というコンセプトは、動き続ける限り永遠に錆びない。

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
Borderless Art Museum NO-MA
滋賀県近江八幡市永原町上16
TEL/FAX 0748-36-5018
休館日：月曜日
（月曜日が祝日の場合は翌平日休館）
E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp
https://www.no-ma.jp



Access アクセス

バス　JR近江八幡駅から近江鉄道バス（長命寺行き）大杉町八幡山ロープウェイ口バス停下車徒歩8分。
車　名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。
国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。（計30分）
JR近江八幡駅から徒歩30分、自転車15分。

※駐車場に限りがありますので満車の際は周辺の有料駐車場などをご利用ください。
※近江八幡駅にはレンタサイクル（駅リンくん近江八幡店）があります。

近江八幡駅からのルート案内動画→